校長の生徒・先生応援日記 Vol.28

学びの匂い

英語を英語のまま理解する力

私たちの日常生活は、特段、英語ができなくても、困ることはありません。しかし、一歩社会へ出れば、ガバナンス、コンプライアンス、コンセンサス、エビデンスなどのビジネス用語を織り交ぜた議論が一般的で、もはや、英語を日本語に訳すことなく理解しなければならないコミュニケーション力が求められています。今後益々グローバル化が進めば、経済、文化、政治などの分野における国際的な相互依存が深まるため、英語が話せないと自分の可能性や選択肢を狭めることにもなり、これらのことを踏まえると、英語力が必要な時代へ変わったと言えるのではないでしょうか。私自身、相手の理解を促すには、日本語で正しく伝えることを大切にしていましたが、ある体験を機に、もはやその考えだけでは通用しないことを痛感したことがあります。

今から１０年以上前のことです。縁があって教育委員会での勤務となり、その役割が先生への指導・助言する立場へと変わりました。生徒を相手にする教科指導と違い、授業や教材を介した教員との議論では、適切な目線合わせが大切です。そのため、相互理解には、正確に伝えるだけではなく、端的な説明で概念やイメージと関連させていく言葉が必要となります。

研究授業後に講評した時のことです。私が、「指導方法については、教科内で確実に共有しなければなりません。」と発言すると、ある先生から「学習メソッドのコンセンサスは、いつまでにフィックスさせればいいですか？」と質問されました。私は、思わず言葉に詰まりました。質問内容ではなく、言葉の意味が全く分からなかったのです。当時は、既に、インセンティブ（動機）、アセスメント（評価）、イニシアチブ（主導権）、ブラッシュアップ（磨きをかけより良くする）、エビデンス（科学的根拠）、ガバナンス（管理体制）、コンセンサス（合意）などの言葉が、英語のまま共通認識を得られるレベルまで浸透していましたが、日本語でしか伝わらないのではないかとの思い込みから、横文字への抵抗感が払拭できずにいたのです。「持ち帰り、確認します。」その場を取り繕うしかなく、今でも、不甲斐ない気持ちになったのを鮮明に思い出します。

令和７年３月１４日（金）から１５日（土）まで、第１学年Ｌ・Ｍ組の生徒は、福島県にあるブリティッシュヒルズで海外生活を疑似体験しました。この学校行事は、特別進学コースのブランド化を図るために実施する本校初の取組です。外国人スタッフによる英語での接客、各レッスンにおける指導など、施設内での体験が英会話の学びそのものです。

お昼過ぎ、バスが現地に到着すると、フロント係がお迎えし、生徒に「Hello～！」と声をかけてきます。バスを降り、大きな部屋へ案内されると、早速、外国人スタッフが英語で施設利用の説明をうなずくこともできないスピードで始めます。身に付けている英単語が両手ぐらいしかない私は、頭の中で日本語に訳そうとしましたが、所詮、焼け石に水でした。

いよいよレッスンがスタート、生徒は、時間の経過と共にレスポンスよく、会話を楽しむようになります。「aha…」「and…」「I think…」片言でも自然な間を取る生徒の姿は、まさに！

I can't help but feel the infinite possibilities.

英語は確かに勉強です。しかし、単語であっても、文法を使った会話であっても、日常的に使う機会を増やすことで、きっと、ビジネス用語の様に「英語を英語で理解する力」が身に付くのではないかと感じるのです。チェックインでは、「May I check-in please?」勇気を振り絞り話しかける生徒一人一人の言葉が講堂に響き渡り、学びの匂いとなって生徒の英会話への自信を高めていました。

令和７年３月